

時潮の波の

(昭和二十一年寮歌)

渋谷富業君 作歌
寺井幸夫君 作曲

序

厳しかる道に仕へて
限ある玉緒惜しむ
げにさあれ深き因縁の
魂ゆるする生命の饗宴
汲まざらめや残の月に
旅の朝早くは明けぬ

一

時潮の波の寄する間に
久遠の岸に佇みて
不壊の真珠を漁りする
嗚呼三星霜の光栄よ
緑の星を夢む時
疎梢を払ふ天籟は
秘誦の啓示語るなり

二

孤窓に流る星屑に
無辺の調律訪へば
測りも知らに底つひゆ
言の葉洩れて伏し祈る
奇しく貴き生命をば
友情を讀ふ歌声の
溶け行く方に馳するかな

三

朽葉ゆらぎて湧き出づる
楡の林の真清水に
己を責めて泣く友の
孤杖を運ぶ逍遙や
遠き誓ひの日を偲び
虚しき春に嘯けば
淡れし影の寂寥よ

四

宿命の道を行く身にも
友を誇らん花筵
銀燭頬涙を照らす宵
沈黙に語る歡喜よ
心を交し思ひ酌み
団欒にふるふ共鳴は
胸の小琴を掻き鳴らす

五

北斗頭上に影冴えて
神秘の息に吹かれつつ
肩組み歌ふ旅の子を
染むる伝統の篝火よ
暮るるに早き青春の日の
追懷を込める此の盃を
汲まん今宵の記念祭

結

近きかな楡陵を去る日は
還り来ぬ足跡愛しみて
ひたぶると打笑む時ぞ
求めつつ得べからざりし
秀逸しき真理の道は
はろかなり我等が前途
進まざらめや